氏名	植田　大雅
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 88 号
学位記授与の日付	2024 年 9 月 26 日
学位授与の要件	学位規程第３条第４項該当
学位論文題目	特別養護老人ホームにおける機能訓練指導員の他職種連携の取り組み― 利用者の生活機能に着目した機能訓練体制の構築に向けて
論文審査委員	審査委員長　小原　眞知子 審査委員　壬生　尚美 審査委員　森　千佐子 審査委員　贄川　信幸 学外審査委員　杉澤　秀博

特別養護老人ホームにおける機能訓練指導員の他職種連携の取り組み
― 利用者の生活機能に着目した機能訓練体制の構築に向けて ―

日本社会事業大学社会福祉学研究科博士後期課程　　植田大雅

【研究背景と目的】

介護保険制度の理念は自立支援であり，その理念の元，リハビリテーションの取り組みが行われているが，「身体機能に着目した訓練に止まっている」との指摘がある．

そこで本研究では，利用者の重度化が進む特別養護老人ホーム（以下，特養）において，生活機能に着眼した機能訓練指導員の取り組みと他の職員との連携方法を明らかにするために，文献研究では，機能訓練の目標設定，機能訓練指導員の現状と機能訓練の到達点を明らかにすること．実証研究では，生活機能の維持に関する業務割合，他の職種との連携内容と生活機能の活用に関する業務への影響，他の専門職との連携プロセスを明らかにすることを目的とした．

【方法】

1. 国内外の特養の機能訓練及び多職種連携に関する文献調査を行った．
2. 実証研究では，東京都内特養の機能訓練指導員に対してアンケート調査（回収率252名:45.2%）及び機能訓練指導員5名にインタビュー調査を行った．

【結果と考察】

文献研究では，重度化した特養利用者の機能訓練の目標は生活機能とその活用であり、他職種連携を進めるための分析視点を設定した．

実証研究では，機能訓練指導員は生活機能に対する取り組みを中程度行っており，他職種連携において「できている部分」の4因子構造の内，「重度化対策・予防」のみが「生活機能」に影響していたことから，本研究で設定した生活機能の取り組み割合を挙げていく必要性が明らかになった．また，「食事」「嚥下」など介助方法の指導に関する連携不足が明確になり、多職種連携・協働を円滑化する工夫を探り，《日ごろからの意識的な人間関係づくり》を基盤に機能訓練に取り組むことが重要である．

利用者の自立支援に向けた連携体制構築を進めるためには，利用者の日常生活をケアする介護職員を中心に貢献することが重要であり，機能訓練指導員が自ら出向いて主体的に活動する必要性が明らかになった．

Efforts at Interprofessional Collaboration among Functional Training Instructors in Special Nursing Homes

Creating a Functional Training System Focusing on Residents' Daily Functioning

Hiromasa Ueda, Doctoral Program in Social Welfare Studies, Graduate School of Social Welfare, Japan College of Social Work

[Research Background and Purpose]

The philosophy behind the long-term care insurance system is to facilitate independence, and the rehabilitation efforts that take place are based on this philosophy. However, rehabilitation has been criticized as being "limited to training focusing on physical functions."

Residents of special nursing homes (denoted here as SNH) are increasingly more severely ill. In order to ascertain functional training instructors' efforts focusing on daily functioning and their methods of collaborating with other staff members in SNH, a literature study sought to ascertain how goals for functional training are set, the current status of functional training instructors, and what functional training has attained. An empirical study sought to ascertain the proportion of tasks related to maintaining daily functioning, the details of collaboration with other professionals and its impact on tasks related to the use of everyday capabilities, and the process of collaborating with other professionals.

[Methods]

1. A literature study was conducted on functional training and interprofessional collaboration in SNH in Japan and abroad.
2. In an empirical study, functional training instructors in SNHs in Tokyo were surveyed. The response rate was 252 (45.2%), and interviews were conducted with 5 functional training instructors.

[Results and Discussion]

In the literature study, the goal of functional training for SNH residents who were severely ill was daily functioning and use of everyday capabilities, and an analytical perspective was adopted to promote interprofessional collaboration.

The empirical study found that functional training instructors engaged in efforts to facilitate daily functioning to a moderate extent. Interprofessional collaboration had a four-factor structure for "things that could be achieved." Within that structure, only the factor "measures to deal with and prevent more severe illness" was found to have an impact on "daily functioning." This highlights the need to increase the proportion of efforts to facilitate daily functioning as set out in this study. Moreover, a lack of collaboration in guidance on forms of assistance such as "eating" and "swallowing" was evident. Ways to streamline interprofessional collaboration and coordination need to be explored, and efforts at functional training need to be based on "consciously forming interpersonal relationships on a daily basis."

In order to create a collaborative system to facilitate resident independence, functional training needs to mainly help the care workers who provide daily care to residents, and results revealed that functional training instructors need to take the initiative and play an active role in rehabilitation.

【審査結果の要旨】

１　審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規程及び同博士後期課程修了細則に基づき、第 3 次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員 4 名及び学外審査委員 1 名が担当した。5 名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	小原眞知子	ソーシャルワーク理論・援助技術開発、保健医療福祉領域
審査委員	壬生　尚美	介護老人福祉施設のケア
審査委員	森　千佐子	高齢者支援、介護者支援、多職種連携
審査委員	贄川　信幸	精神保健福祉、プログラム評価、支援プログラムの普及
学外審査委員	杉澤　秀博	老年学

2023 年 10 月 31 日までに提出された第 3 次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11 月 25 日に公開口述試験を行った。2024 年 9 月 5 日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会の結果報告を受け、博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの提案がなされ、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2024 年 9 月 26 日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

２　博士論文の評価

本研究は、特別養護老人ホーム（以下、特養）における機能訓練指導員の生活機能に着目した業務の明確化とそのための他職種連携のあり方を検証した論文であり、特養における機能訓練の目標設定とその実現のための条件を、既存研究に基づき理論的に検討し、それを実践する特養の機能訓練指導員を対象とした実証的な研究である。本研究は、理論研究と実証研究の 2 部構成であり、それぞれ以下のような目的が設定されている。文献研究においては、特養入所者の機能訓練の目標設定、それを実現するための条件、特養における機能訓練指導員の現状と課題、を明らかにすることとしている。理論研究において特養利用者の重度化の背景、それに対応した施策の展開とその問題点、特養の機能訓練指導員を対象とした研究の意義を明らかにした。その上で、混合研究法を用いて、機能訓練指導員の業務内容や役割、機能訓練指導員と他職種との連携体制のあり方を明らかにした。実証研究においては、自立支援に向けた訓練にとって重要な役割を担う機能訓練指導員を対象に、生活機能維持に関する業務の割合、他職種との連携とその生活機能維持に関する業務への影響、他の専門職種との連携のプロセスを明らかにすることを目的に設定している。特養の利用者の特性から、生活機能に着目した点では、これからの日本の特養における機能訓練のあり方に一石を投じる意義深い研究である。データの分析は、質的調査も量的調査も丁寧になされ、論述についても適切である。社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度な実践的研究能力を兼ね備えているものと判断した。以上より、社会福祉学の博士論文として十分な水準に達していると認められる。

３　最終試験の評価

本研究において、他職種の連携内容「重度化対策・予防」が日ごろの業務内容「生活機能」「計画作成・評価」に影響を及ぼしていることを明らかにし、24 時間ケアをする介護職員を側面的に支え、重度化する特養利用者支援における機能訓練指導員の役割を明確にした点、さらに「日ごろからの意識的な人間関係づくり」「介護職員のニーズを意識した働きかけ」の重要性と、機能訓練指導員の食事等の日常生活支援に関する取り組みの課題を明確にした点は、今後の多職種連携における機能訓練体制づくりに向けた特養のケアの実践に貢献できるものを生み出したといえる。植田氏には、社会福祉学の豊かな学識に裏打ちされた、社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度の実践的研究能力が感得される。審査委員５名の全員一致で博士号授与に相応しいと判断した。